

女性として母として、そしてアーティストとして生きる —「輝く生命（いのち）の絵画展」事務局を担って—

松田美八重

はじめに

地域の中で、それぞれの個性を発揮しながら生き生きと暮らすこと、それは私のような小さな力でも実現できると確信している。私は、22歳の時に頸髄損傷による四肢麻痺となり、そのため生活全般において介助を必要とすることとなった。しかし、さまざまな人たちとの出会い、アート活動、そして何よりもよき伴侶を得て、子どもにも恵まれ、今は地域社会に少しでも貢献すべく日々を送っている。

障がいのある女性は、ともすると二重のハンディを負うと言われている。それは、社会参加を阻害する要因として「障がい」、さらに「女性」が挙げられることがあるからである。そこで、私は、本レポートを通して、この二つは“ハンディ”ではなく、まさに“力”となることを伝えたいと思う。アート活動がさまざまなネットワークを作り、それらが日々活発につながっている生活は、気負いも無く、淡々として、なおかつ輝いている。絵を描く多くの仲間たちと、また、多くの地域の方々と、共に歩んでおり、充実感をもって暮らしている。その根源的な力というものを、私の人生とアート活動の仲間たちと重ね合わせて記述し、輝く生命(いのち)とはどこから湧いてくるのか、一地域の小さなアート活動の事務局を担っている私の視点から導き出し、考察してみたいと思う。

第1章 私のプロフィール

1. 今日までの歩み

1956年4月5日に生まれ、ごく普通の小中学生、高校生と過ごし、そしてデザインの勉強のため専門学校に入学した。その後、市場調査の会社に入社し、グラフィックデザインの仕事に従事していた。楽しい社会人生活を送る中、3年後の1978年に過労により倒れ、検査入院をすることとなる。脳血管撮影中にショック状態となり、頸髄損傷(頸髄の4番・5番レベルの損傷)による四肢麻痺となった。日本医科大に7年間入院し、リハビリのため、1984年に神奈川県総合リハビリテーションセンターの更生ホーム(肢体不自由者更生施設)に入所することとなった。ここでは、手や足が使えなくても“自律”した生活ができる、自分の生活をマネジメントすることを学んだ。また、外出やサークル活動に多くのボランティアが施設を訪れていた。そのボランティアの一人と出会い、愛をはぐくみ、少し辛い反対もあったが、それを乗り越え1985年8月結婚することができた。生活面で介助が必要な私であったが、夫の献身的な協力もあり、1987年に帝王切開で女児出産という喜びを味わうことができた。その一人娘も今は保育士として働き始めて8